

いまの姿と将来の姿のイメージ ①

平成 25 年 11 月 理事長 片山喜章

運動会に向けて、精いっぱい“クラス集団”として力発揮した子どもたちは、当日、見える形で“育ち”を示してくれました。子どもたちだけでやり切る取り組み＝子どもの力を信じた結果、一定の成果で応えてくれた子どもたちのことを誇りに感じ、愛おしく思います。

11月。子どもたちは、乳児を含めて異年齢の友達と過ごす機会が多くなります。これまでと異なる関係性が生まれ、異年齢ならではの姿も見せてくれることだと思います。

そんな姿を期待する一方で、4月以降、子どもたちの姿を、(時々)じっくり観察し、様々な報告を受けていると、あらためて考えさせられることがあります。多くの子どもが遠慮なく自分を出して、ありのままの姿を現しています。それは、ある意味、健全ですが、度を越した“ふざけ”があったり、自分を律することができず、暴言を発したり、カッとなって乱暴に振る舞う姿を目の当たりにすることもあります。これは、今、深刻になっている“いじめ”の前兆なのか、よくわかりません。この時期に表面化しない分、後々、陰湿ないじめに至る気もします。今の“乱暴な言動”は、昔風の子どもの姿のようでもあり、「言い合い」や「ぶつかり合い」をうまく表現できない姿だとも思います。が、決して、望ましいとは言いがたく、「子どもとは何か」「社会の変化と望ましい保育」「大人の心持ちや役割」など、基本のキから検討し、見直しをはじめているところです。この問題は、保育園だけでは解決できない問題です。保護者の方も園任せにしないで問題解決のパートナーとして、園と同一方向を向いて、話し合いの質を高めて連携しない限り、解決には至らない社会全体の問題です。

例えば、子どもを「出来る・出来ないの物差しで評価しない」「発達を年齢や月齢から見るのではなく、その子自身の状態が、発達の到達点で、そこからその子固有の課題が生まれる」ということは、保育の業界では、耳にタコができるほど聞かされている「定説」です。

しかし、私たち自身がそんな教育を受けてこなかったのに、体得に至っていない。日本は『子どもの権利条約』に批准している国であるにもかかわらず、おざなり状態で、社会全体がまだまだ、出来る・出来ないで子どもを評価する実態(人権問題)がある。そんな事が相まって「定説」が浸透しない。ここに子どもの内面がすさむ遠因があると考察しています。

この点を意識して、私たち保育者集団や保護者の皆さんを含めた大人が“自分の本音”ではなくて“子どもの側に立った新しい自分(価値観)を創り出す”。そんな努力を大人の責務として、奮闘をしなければ、いじめ、非行、ニート等の問題は、解消しないと思います。

※「良い子保育園」に行くと、心地良いですが、それは、子どもの本来の育ちの姿でなくて、大人の威圧のなかに問題が隠れている良い子である場合が多く、学童後期や思春期以降に歪みが生じ、社会適応を困難にしている、それもまた、現実の問題です。 続